

中小・中堅製造業におけるデジタル技術の導入・活用について

中小・中堅製造業におけるDX推進は、製造工程における生産性向上などにより、その成果が見えやすいものの、DXは道半ばという企業が多い。本調査研究では、アンケート調査および企業ヒアリングを実施することで、中小・中堅製造業でDXがうまくいった企業のデジタル技術の導入にかかわるプロセスを浮き彫りにした。

○調査研究結果のポイント(DXがうまくいった企業の特徴)

- (1) デジタル技術の導入を意思決定する際に多様な階層の社員を巻き込んでいる
- (2) デジタル技術を導入した後は、部門横断的な視点でデータを活用・共有しており、社内全体を巻き込む形での勉強会や自社社員の育成を行っている
- (3) 社内のデジタル・DXなどを統括する、役員でない専任の職員を配置している

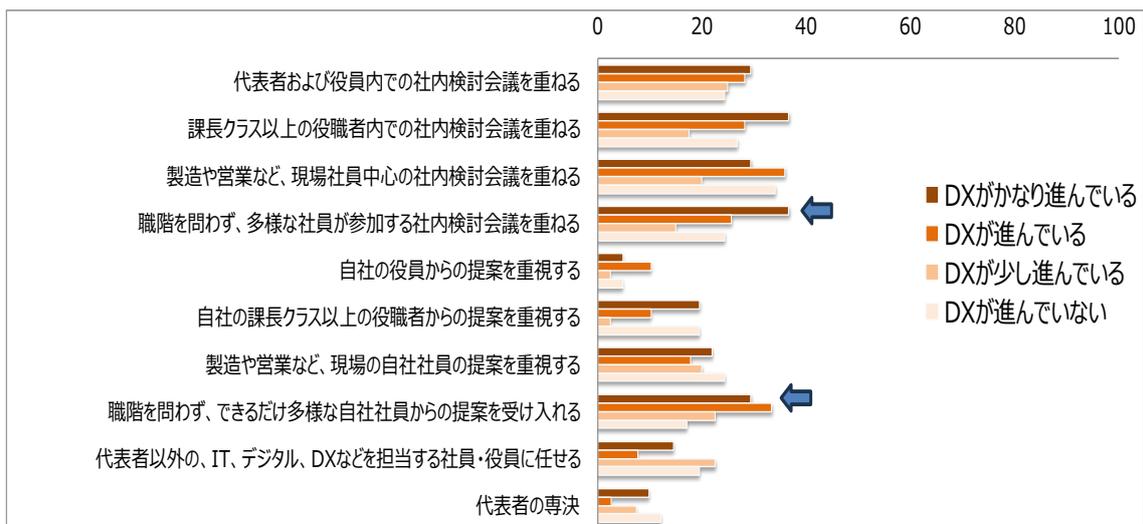
○調査結果のポイント解説

デジタル技術導入後の「社内プロセスの変革の程度」（6個の設問）および、「成果の程度」（8個の設問）の結果から、個別企業のDX進展度を計算し、進展度合いによって企業を4分類した。以下では、アンケートおよびヒアリングの結果から、この度合いが最も高かった「DXがかなり進んでいる」グループのプロセスを取り上げる。

(1) デジタル技術の導入を意思決定する際に多様な階層の社員を巻き込んでいる

「DXがかなり進んでいる」グループでは、多様な階層の社員から構成される社内検討会議を重ね、多様な階層の社員からの提案を重視している。

図表1 デジタル技術を導入する際意思決定とDX進展度（複数回答、単位：％）



(出所) 本文 p.45 (注) 複数回答であり、DX進展度別の回答企業数を分母としている。回答企業数は、「DXがかなり進んでいる」が40、「DXが進んでいる」が39、「DXが少し進んでいる」が40、「DXが進んでいない」が41。

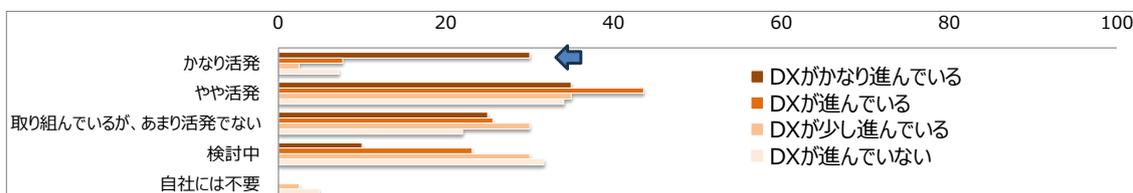
（2）デジタル技術を導入した後は、部門横断的な視点でデータを活用・共有しており、社内全体を巻き込む形での勉強会や自社社員の育成を行っている

「DXがかなり進んでいる」グループは、部門横断的な視点を持ち、他のグループよりも、データの活用・共有が目立つ。実際に、DXがかなり進んでいる企業では、社内の生産性などのデータを常時見られるようにしており、データをフィードバックし、生産性向上につなげている。

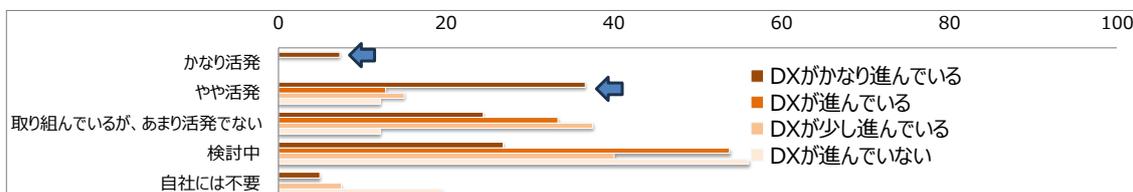
自社社員の育成や社内勉強会なども、「DXがかなり進んでいる」グループで目立ち、社員がデジタル技術活用への理解を深めている。これによって育った人材が、DX化の目的を明確化したり、自社の業務フローとシステム等との関係性を具体的にイメージしてITベンダーと交渉したりしている。

図表2 デジタル技術を導入した後の社内活動とDX進展度（単位：％）

各部門の間でのデジタルデータの共有・連携（n=160）



デジタル化・DX推進のための社内勉強会（n=161）

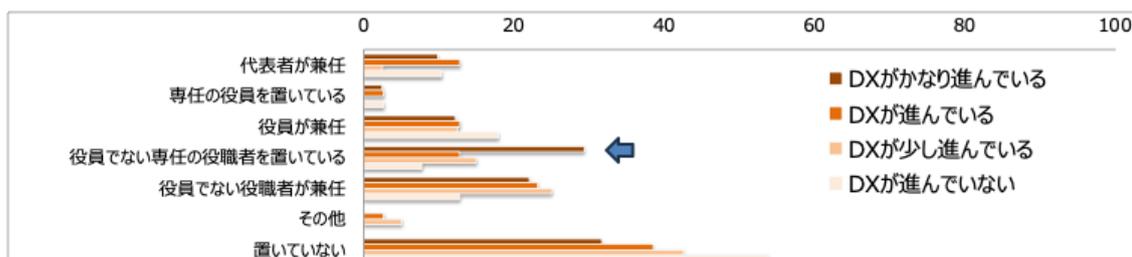


（出所）本文 p.47-48

（3）社内のデジタル・DXなどを統括する、役員でない専任の職員を配置している

「DXがかなり進んでいる」グループでは、社内のデジタル・DXなどを統括する、役員でない専任の職員を配置していることが特徴的にみられる。DXがかなり進んでいる企業は、役員でない部長級などの職員が、社内の上や部門の間に立ち、うまく調整している。

図表3 社内のデジタル・DXなどを統括するポストの配置とDX進展度（単位：％）



（出所）本文 p.50（注）複数回答であり、DX進展度別の回答企業数を分母としている。回答企業数は、「DXがかなり進んでいる」が41、「DXが進んでいる」が39、「DXが少し進んでいる」が40、「DXが進んでいない」が39。